

1

出版流通・販売

出版業界における流通・販売は、明治末年の委託販売制（返品条件付売買）と定価販売制（現・著作物再販制度）を基本とし、書籍・雑誌は出版社―取次会社―小売書店の流通経路をとおして読者が購入する。取引条件は、出版社と取次会社間は定価に対する取扱いマージン制（卸正味）を、取次会社と小売書店間は定価に対する売上げマージン制をとっている。

戦後の1945年（昭和20）以降、現在まで出版業界は、①正味問題、②諸掛り運賃問題、③再販制問題、④発売日問題、⑤返品減少、責任販売制などの流通販売をめぐる諸課題の解決にあたってきたが、とくに1956年（昭和31）に雑協が、57年に書協が設立されてからは、取協、日書連の4団体間で課題ごとに意見交換、調整を行うようになった。

そのなかでもな課題は、正味問題と諸掛り運賃問題であった。正味問題では、書籍の定価別正味制と出版社別一本正味制が、74年の定価別ランク改定と地方正味格差撤廃のための正味引き下げと負担金となり、雑誌では71年の正味改定と地方正味格差撤廃となった。諸掛り運賃問題では、それまで出版社は取次会社の軒先渡しを基本として、取次会社と小売書店の間で解決すべき問題であるとしていたが、国鉄運賃などのたび重なる値上げを背景に、書籍は59年全国均一運賃込み正味制を実施、雑誌は67年に取次会社の地方書店への運賃請求が全廃された。これらの問題は、75年までにルール化され現在に至っている。

即売ルート、コンビニエンスストア（CVS）、オンライン書店など販売ルートの多様化が進むなかで、現在も継続して取り組んでいる課題は雑誌の発売日問題の改善、返品減少問題、情報と物流の結合、景品表示法など公正取引・消費者保護に関する問題などがあり、とりわけ再販制の維持は出版業界としては依然として大きな課題となっている。